

# 第65回 「奥秩父の父」をたたえる

## 木暮理太郎

前夜祭：

令和6年10月19日（土）午後5時より みずがき山リーゼンヒュッテにて

碑前祭：

令和6年10月20日（日）午後2時より 金山平・木暮碑前にて

**木暮理太郎** こぐれ りたろう（1873～1944）

群馬県出身。東京帝国大学（哲学、史学）中途退学。

6歳のとき祖母に伴われ赤城山、13歳で富士講に同行して富士山、明治26年夏、妙義、浅間、蓼科、木曾御岳に登る。明治28年「日本風景論」に刺激を受け、29年夏、針ノ木越、立山、乗鞍、槍、御岳、木曾駒、甲斐駒、金峰山をめぐる大登山計画をしたが、槍ヶ岳はクマが出ると島々で言われて断念した。その後、田部重治と知り合い、もっぱら二人で高尾山や秩父の山々を縦横に歩き、日本の登山史上、秩父時代とも言えるエポックを画した。

大正2年9月、日本山岳会入会、この年の夏、田部と二人で槍、双六、薬師、剣の大縦走を案内無しで敢行、別山尾根の初登を記録、また翌年、大正3年夏も二人で毛勝、剣、立山、東沢、赤牛、野口五郎、烏帽子をつなぐ記録的な登山を行った。大正4年夏、赤石、荒川、悪沢、6年7月、朝日、白馬、五龍、鹿島槍、針ノ木縦走、7年夏、白根三山から蝙蝠岳、8年夏、黒部下廊下を探検。

「東京から見える山々」という独自の研究にも熱中し、また晩年にはヒマラヤの研究に力を注ぎ、昭和11年共立社から発行された登山講座に「中央アジアの山と人」と題する研究論文を発表した。昭和10年12月、高頭仁兵衛のあとをうけ日本山岳会第3代会長となる。幾度か名誉会員推薦の話も出たが受けなかった。

著書は昭和13年、14年『山の憶ひ出』上下2巻が発行されている。

昭和19年5月7日没。

（山と溪谷社「世界山岳百科事典」より）

主催 木暮碑委員会

## 前夜祭次第

10/19 午後 5 時より

みずがき山リーゼンヒュッテにて

開 会 日本山岳会山梨支部

主催者挨拶 山梨県山岳連盟 会 長 小宮山 稔  
日本山岳会山梨支部 支部長 古屋 寿隆

来賓挨拶 公益社団法人日本山岳会 会 長 橋本 しをり 様  
木暮理太郎翁の功績を語り継ぐ会 浅海 崇夫 様

講 演 演題「木暮理太郎と大島亮吉」  
講師 矢崎茂男（日本山岳会山梨支部 理事）

閉 会 山梨県山岳連盟

引き続き、懇談会

## 記念登山

10/20 午前 8 時より

「魔子」(1700m) : 「甲斐百山」

日程 : 8 : 00 みずがき山リーゼンヒュッテ集合・出発＝登山口～金鉾跡～魔子  
山頂～分岐～瑞牆山荘～登山口＝13 : 00 金山山荘キャンプ場・駐  
車場・着

\*この後 14 : 00 から金山平で開催される「碑前祭」に参加します。

### 魔子の人穴の話

むかし、金峰山の近くに魔子の山とよばれる異様な山があったとき。この山には、今にも妖怪が飛び出してきそうな不気味なほら穴があったとき。村人はこの穴を魔子の人穴とよび、決してこのあたりには近づかなんだ。それはな、もっとむかし、この山に魔子（まご）じじいという大男がおったんじゃ。そいつのからだといったらそれはがんじょうでな、鳥やけものを食べ、村里へ出てきては家畜をぬすみ、時には赤ん坊までもさらっていったそうじゃ。ほら穴の入り口には、骨が積み重なり、奥からは生臭い風が吹いてくるそうな。子どもがいつまでも泣いたりすると「魔子じじいが来るぞ」と言えば、ぴたりと泣き止んだそうじゃ。

(須玉町歴史資料館「すたまの民話」より)

\*平成 7 年の調査でこの魔子の洞穴は古い鉾山の坑道だとわかりました。実は、この伝説は、江戸時代に、この鉾山に人を近づけないようにするために、創作されたのではないかと考えられています。

## 碑前祭次第

10/20 午後 2 時より

金山平・木暮碑前にて

司会 日本山岳会山梨支部

開 会 日本山岳会山梨支部

献 酒 山梨県山岳連盟  
白鳳会  
木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会（群馬県太田市）

献 花 日本山岳会山梨支部

主催者挨拶 増富ラジウム峡観光協会 事務局長 小森 良直  
山梨県山岳連盟 会 長 小宮山 稔  
日本山岳会山梨支部 支部長 古屋 寿隆

来賓挨拶 山梨県北杜市 市 長 上村 英司 様  
公益社団法人日本山岳会 会 長 橋本 しをり 様  
木暮理太郎翁の功績を語り継ぐ会 事務局長 浅海 崇夫 様

献 杯 山梨県山岳連盟

閉 会 山梨県山岳連盟

## 講 話

演 題 「明治期、金峰山に登った人たちと紀行文」

講 師 内藤 順造 氏

（山梨県山岳連盟 顧問・日本山岳会山梨支部 顧問）

## ほうとう食う会

10/20 午後 3 時より

金山山荘キャンプ場にて

司 会 増富ラジウム峡観光協会

金山山荘キャンプ場にて、大鍋による山のキノコやカボチャのほうとう。  
地元、増富ラジウム峡観光協会によるおふるまい。

## 木暮碑について

昭和 25 年 5 月、霧の旅山岳会、石楠花山岳会、日本山岳会、山梨県山岳連盟、地元観光協会などの手により上半身のレリーフが現在地より奥に建立された。

昭和 34 年の台風で崩壊したが、昭和 35 年関係者の努力により碑石を搬入し現在位置に再建、10 月 8 日、9 日に除幕式を兼ね第 1 回木暮祭を行った。  
以来毎年秋、地元増富ラジウム峡観光協会、山梨県山岳連盟、日本山岳会山梨支部の三者からなる木暮碑委員会が「木暮祭」を主催している。



### 「もみじ」

1. 秋の夕日に てる山もみじ  
こいもうすいも 数あるなかに  
松をいろどる かえでやつたは  
山のふもとの すそもよう
2. 谷の流れに 散り浮くもみじ  
波にゆられて 離れて寄って  
赤や黄色の 色さまざまに  
水の上にも 織る錦

### 「里の秋」

1. 静かな静かな里の秋  
おせどに木の実の落ちる夜は  
あゝかあさんとただ二人  
くりの実にてますいろりばた
2. あかるいあかるい星の空  
なきなき夜がもの渡る夜は  
あゝとうさんのあのえがお  
くりの実たべては思い出す

2024.10 木暮碑委員会：増富ラジウム峡観光協会  
山梨県山岳連盟  
(公社) 日本山岳会 山梨支部